

地方自治ここにあり 首長インタビュー

高齢化率県下一のまちで 住民に寄り添い、福祉の町・観光の町へ



西前啓市古座川町長

古座川町 西前啓市 町長

今回の「首長インタビュー」は、古座川町の西前啓市町長に登場していただきました。西前町長は、2016年6月5日に、三度目の挑戦で42票という僅差で当選されました。

和歌山県内一の超高齢化の町で、とにかく住民の意見を聞きながら、日々奮闘されている町長に、当研究所の鈴木裕範理事長が本音をお聞きしました。(インタビューは2017年11月20日)

三度目の挑戦

鈴木：「3度目の正直」という言葉を実現されたのが西前町長だと思います。3度目の挑戦に、西前町長の町政に対する強い意志を感じるんですが、いかがだったのでしょうか。

町長：私は職員として38年勤め、議会と教育委員会以外ずっと回ってきて、最後

の方は長い期間、福祉関係に従事したんです。

町長選挙は、思いつきで出たんじゃなしに、役場へ入った当時から、チャンスがあったら絶対に町長をやるんやと心の中にずっと持っていたんです。

鈴木：なるほど。自分が町長になったならば、こういう姿勢で行政を運営するんだという思いがあったということですね。その西前町長にお聞きします。町政に対する基本的な政治姿勢から伺いたい。

町長：やっぱり公正でなければいけないということですね。いろんな人の意見や思いをとにかく聞くこと。そして、行政に結び付けていけたらいいということです。御存じのように高齢

者ばつかりの町なんです。ですから、高齢者の生活をどうサポートするかということ、真剣に取り組む。介護保険が始まる2年前に

国のモデル事業の募集があった、たまたま私が担当していたので手を挙げて、全国で10か所のモデル団体の

うちの1か所に選ばれたんです。そのときから、何十年も高齢者の方の生活を見てきたので、私は、そういうところが分かるんじゃないかなということがあったんです。

鈴木：町長選挙は、42票という大接戦でした。町を二分する激しい選挙戦だった証明でもあります。それだけに、どちらを支持するかで分かれた町民の民意を融和することが、トップとして必要かと思うんですが、どうでしょうか。

町長：私は、前回136票差で負けたとき、マスコミの方に答えたのは、当選された方にノーサイドでお願いしたいと言わせてもらったんです。今回たまたま支持を頂いて、立場が逆にな



古座川町役場

りましたけども、やっぱり私はノーサイドで頑張っていきたいと答えたんです。町民のための町政をするんだというつもりで、1年5か月やってきたんです。議会でも少数ですけども、質問の中にちらほら見られます。一般の方は、極端に西前になつたから何もかも反対やという方は、ないように思います。中には、西前では困ると言い続けている人もいますよ。だけど、私はそれを融和させていくために、自分から出向いていって、いろんな会話をすることによって、日々、活動しているつもりです。

町の現状と課題

鈴木：古座川町は、平成の



中国桂林の風景にもたとえられる古座川

市町村合併までは、和歌山県でもっとも面積の広い町でした。一方で、過疎化に歯止めがかからない。高齢化率は和歌山県で一番、50%を超えていますね。

町長：11月1日現在で51.9%です。

鈴木：地方創生総合戦略で、2040年までのシミュレーションですが、人口と高

齢化率は、どうなる見通しですか。

町長：人口は今、2800人ですが、1500人ぐらゐまで減少します。高齢化率は58.6%ぐらゐに上昇する見通しです、いまのままだと。

鈴木：古座川町の最大の悩みと申しますか、解決しなくてはならない課題というのが、この人口減少と超高齢化にどうブレーキをかけるかということだと思えます。人口問題、その辺の対策は、いかがでしょうか。

子育て支援

町長：古座川町は、昭和39年ぐらゐを境にずっと人口が減っています。原因は、やっぱり働く場所がないということが一番大きいですよ。若い人が、戻ってきてくれるような政策をすることが1つの方法だと思えます。私は、当選させてもらってから、若い人に残ってもらおうために、若い人たちの生活の負担を軽減するため、子育て支援を思い切

ってやろうと、議会の協力とを求めながらやってきました。医療費の無料化は、今年の4月から、15歳未満の児童生徒から、18歳、高校卒業時まで3か年の延長をしたんです。そして、給食費も保育所と小学校は、去年の10月から無償化して、今年4月から中学生まで拡大したんです。保育料についても、今年4月から所得の低い人（人数的に約半分ぐらゐ）は無償にして、残りのまあまあ所得の高い人は、2分の1（国の基準の4分の1）にしました。

鈴木：子育て支援の関連予算は、かなりの金額になつたんでないですか。

町長：いや、そんなにむちゃくちゃじゃないですよ。今年4月から無償化した保育料で、大体7、800万円。高所得の分で、大体300万円弱ぐらゐだと思えます。うちができたのは、対象者がそんなに大規模じゃないというのがありますよ。

鈴木：どういうやり繰りで、予算の捻出が可能になった



高池保育園

するということも徹底しようと思っています。

若者の定住対策

鈴木：若者の定住対策として、働く場、仕事をどのようにつくりだすのか、これについては、どうお考えですか。

のですか。

町長：基金もそれなりにあるし、とにかく無駄遣いはあかんよと、いる分だければということ徹底しているつもりです。住民の求めるものであれば、ハードであつてもソフトであつても、住民と話し合いをしながらやればいいと思います。

住民の求めないものを行政サイドでつくつても、結局無駄遣いというのを、これまで見てきたので、子育て支援の予算は大した金額ではないと考え、議会に提案したんですけど、特に反対もありませんでした。必要なことにはお金を入れる。そうじゃないものは始末を

町長：たとえば、ここ3、4年ぐらゐ前から、ニクニク生産を若い人らが起業して、やっているんですよ。若い人でも農業に従事してくれる人もいるし、櫛をつくつたりする人もいます。そういう方々の支援もやりたいなということで、設備投資を商工会で融資して、事業を推奨してらんですが、もっと利子補給できるように仕組みづくりを考えています。今、商工会でやっている利子補給が1パーセントなんで、産業の振興基金みたいなものをつくり、もうちょっと助成できないか相談中なんです。

鈴木：そうですね。若い人たちの移住といえば、I、U、Jターンの若い人たち



小川地区にオープンした女性が経営するカフェ

が、カフェとかレストランとか、いろんな形で、食を中心に移り住む動きが各地で見られますけれども、古座川町でのそうした傾向はどうなのでしょう。

町長：少ないです。町内では小川のカフェと、中崎地区に喫茶店があります。

鈴木：自ら仕事づくりをしていこうとしている若い世代の起業を支援する補助金も大事なところで、古座川

で起業したら、こうした支援をしますという制度的なものはいかがでしょうか。



保健福祉センター

町長：うちは農林業の町やから、産業振興補助金は結構多いんですよ。

論してきた経緯もあるんですよ。

鈴木：期限が切れるような補助制度ではなくて、自立できるところまで支援できるように仕組みをしつかりつくっておかないと、お金の切れ目が縁の切れ目みたいになつて、それで失敗しているところもたくさんあります。さきほどのニンニク生産の方々にたいする支援ですが、どのようなモデルがつけられるのか、注目させていただけます。

そうですね。そこを十分活用させてもらおうということがまず前提にあります。そして、この奥の七川というところの施設でも、1か所（町の建物で現在改修中）

鈴木：そうですね。若い世代を含めて、この町で多くの人が暮らしたいと思うには、古座川町の魅力づくりが大事ですが、今後どういうふうに進めていくお考えでしょうか。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。

いっぼう、高齢化率が50パーセントを超え、2人に1人が高齢者の町という現実によいように立ち向かうのか。高齢者が一生を安心して送ることができる、住みやすいまちづくりをどう進めていくお考えですか。

そうですね。そこを十分活用させてもらおうということがまず前提にあります。そして、この奥の七川というところの施設でも、1か所（町の建物で現在改修中）

鈴木：そうですね。若い世代を含めて、この町で多くの人が暮らしたいと思うには、古座川町の魅力づくりが大事ですが、今後どういうふうに進めていくお考えでしょうか。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。

高齢者の対策

町長：町内に高瀬会という民間の社会福祉法人がある

んですよ。そこを十分活用させてもらおうということがまず前提にあります。そして、この奥の七川というところの施設でも、1か所（町の建物で現在改修中）

鈴木：そうですね。若い世代を含めて、この町で多くの人が暮らしたいと思うには、古座川町の魅力づくりが大事ですが、今後どういうふうに進めていくお考えでしょうか。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。

林業の課題

いっぼう、高齢化率が50パーセントを超え、2人に1人が高齢者の町という現実によいように立ち向かうのか。高齢者が一生を安心して送ることができる、住みやすいまちづくりをどう進めていくお考えですか。

そうですね。そこを十分活用させてもらおうということがまず前提にあります。そして、この奥の七川というところの施設でも、1か所（町の建物で現在改修中）

鈴木：そうですね。若い世代を含めて、この町で多くの人が暮らしたいと思うには、古座川町の魅力づくりが大事ですが、今後どういうふうに進めていくお考えでしょうか。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。

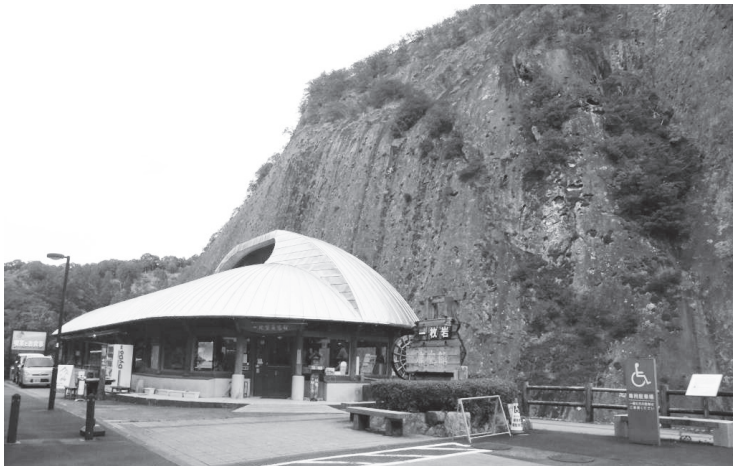
この町の暮らしをどう思っているのでしょうか、意識調査をしたことはありますか。

町長：そういう内容のものはやった記憶ないです。明

神から下は、13年災害、23年災害のときに、2回水害で浸かっているんですけど、でも、よそへは行きたくないんですよ。年がいったら今のままがええんやという高齢者の方が多いんで、意識改革しようと思っても非常に難しい問題です。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。



名所一枚岩と道の駅

を回してくるのは、やっぱり山の中でないかと無理なんです。そして、あんまり大きなものをつくっても、材料の確保が難しいと言っていました。それでも近くへできたら、間伐材を山で腐らすより軽トラで積んでいったら、固定価格で引き取ってもらえるという魅力もある。近くでやってくれる団体があれば、有り難い。そうした可能性も検討してもいいと思うんです。

観光産業の振興

鈴木：もう1つ、川と森を活かしながら、観光産業を振興していくことは、この町にとっても、人を呼び込み、山村と都市の交流で地域を活性化させることにもつながります。雇用も含めて、重要な課題だと思います。

町長：1人でも多くの人にきてもらうようにしていかなくちゃいけない。特に冬場のお客が少ないですから。しかし、古座川町には、宿泊する施設が少ないので来ても日帰りになる。そのあたりのことも、考えていかなければいけないと話し合いはしているんです。

じつは、私たちの町にはいま、観光協会がないんです。4年前まであったんですけど、運営していくのが大変やということ、前の町長さんのときに解体したんです。

和歌山県下で観光協会がないのはうちだけです。もう一度、観光協会を再構築

をしようと、いまいろいろな団体の方々と話し合いを重ね、来年の4月をめどに観光協会をつくらうと、作業しています。

鈴木：そうですか。地域を支える産業構造が、第一次産業の衰退によって変わる中、どこの地方自治体も観光産業の育成に取り組んでいる中で、驚きました。

町長：それで、古座川の現況も含めてインターネットとかホームページで発信していきたいし、ふるさと納税と関連して、今、JTBの方と話をしているんです。うちは地元産品は少ないですけれども、それをうまく活用すれば、やりようによっては、十分やっていけると思っています。

鈴木：古座川町の産品というところ、やはり平井地区を中心としたユズと、ユズに関連する商品があります。長年の努力で和歌山県を代表するブランドに成長していると思います。古座川で捕れるアユの一夜干し、それと和峰（日本蜜蜂）による貴重な山のハチミツ。こ



平井のゆず

れは高級品で、美容にも健康にもいいということで、ますます関心を集めています。蜂蜜を採取する「ゴウラ」の文化は、もつと発信してもいい。それともう1つ、いま町が取り組んでいるジビエがありますね、11月にはジビエグランプリで大賞を受賞し、加工施設はモデル地域に選ばれました。山村の豊かな資源、文化ですね。そうしたものを、観光資源に活用していくことが考えられるのではないのでしょうか。観光の町づくりの視点から、そうした産業の芽を育てていただきたいと思っています。

鈴木：話は変わりますが、

ふるさと創生

地方創生総合戦略で古座川町がよみがえるのかどうか、そして古座川町の再生のために何が必要か、これについてはいかがでしょうか。

町長：よみがえるかって言われたら、すごく厳しいと思います。少子高齢化というのは、今始まったわけではないんです。ふるさと創生と言っても、受皿がないですからね。ハローワークの所長らとも話をするんですけど、正直言って、アベノミクスの効果は、田舎ではちょっと無理やろって言うてますよ。大都会の大企業は、メリットがあるかも分かりませんが、地方は恐らく、非常に厳しいと思います。

鈴木：アベノミクスの恩恵は、地方では実感できないと。

町長：そう思いますね。

鈴木：安倍内閣のもとで言われている地方創生も地方が頑張るための力にはなっていないというのが、率直な感想だということですね。

町長：厳しいと思います、



小川の総合センター・僻地診療所・役場出張所

本当に。
鈴木：厳しい中で、町長はどう取り組むのか、努力されるのか。
町長：まちづくりには終わりが無いと思います。その中で時代に対応するものを求めて、何にでもチャレンジするしかないと思うんですよ。いろんな制度、政策をつくりながら、住民が求

めるものに伝えていくことだと思う。まず、観光協会をつくって、とにかく町をよくその人に知ってもらおうとが、一番必要だと思っています。そして、地元製品の宣伝や、古座川町にはこういういいものがあるんですよとピーアールして、1人でも多くの人に足を運んでもらわん限り、何も生まれてこないと思うんです。いろんな角度から、商品も始めてみようと思います。今はシルバー人材センターもないので、4月から6代から70代ぐらいの仕事のない人に動いてもらうということで進めていきたいと思っています。

高齢者の人数を調べてみただんですけど、60歳から75歳まで大体800人いるんですよ。そのうち60歳から65歳までの人が、213人いるんです。その年代の人でない、できないことであると思うんですよ。
鈴木：持つてる知恵と経験や技術もありますからね。
町長：そこなんです。この上流に月野瀬という地区があつて、そこで月野瀬大根という評判の良い大根をつくっていたんですよ。それをグループで復活できないか一遍考えてよという話をしているんです。
鈴木：町民一人一人が、行動する、そんな町にしたいということですね。
町長：そのとおりです。
鈴木：地域にある伝統的な食というのは、一番活用しやすい特産品だと思うんですね。広い町の利点を活かすとすると、それぞれの地域にある特色を具体化できると、面白いと思います。

伝統野菜とか、伝統的な農産物を特産品にするというのは、古座川町みたいなところだったらあるんじゃないかと思えます。
ところで、古座川町は、和歌山県内では女性が頑張ってきた代表的な地域の1つだったと私は思っています。平井の寺本さんたちに始まるユズのむらづくりが、「柚子の町」古座川というブランドに成長しました。若い世代がそれに続いています。古座川のこの女子力を高く評価して活用すべきだろうと思います。
古座川女子の会みたいな組織をつくるとか、検討してみたいですね。最後に、町長から言っておきたいということがありますら、お伺いしたいんですけれども。

鈴木：高齢者のみなさんは、ご苦労された方ばかりなんです。少しでも支援するというところで今年の6月から、病院の差額ベッド料の自己負担を町で負担するようになったんです。近くの公立病院で差額ベッド料が、1日2000円ぐらいなんです。それを上限にして、3か月で18万円を免除するという制度を今年から取り入れたんです。少しずつですけど一つ一つ重ねながら、制度をつくっていききたいなと思うんですよ。
鈴木：恩恵を受ける人は、どのくらいあるんですか。
町長：平成26年の串本病院を参考にしたら、全体で延べ1000人弱ぐらい。金額にして150何万円だったかな。それは串本病院だけやなしに、差額ベッド料がある公立病院は、全国どこへ行っても可能なようにしたんですよ。
鈴木：古座川町は超がつく高齢地方自治体です。その現実と向き合う政策でもありますね。福祉に長けたずさわってこられたご経験を町政に、福祉の充実をめざす西前町長の思いと受け取りました。きょうは、貴重な時間を頂きまして、ありがとうございました。



観光と交流の拠点 月野瀬ぼたん荘